

【論 文】

歌をつなぐ

【要 旨】

万葉集第四期の歌人大原真人今城は、自身が制作した歌は八首とそう多くはない。しかし、宴席で古歌を「伝誦・伝読」したということが記されている。伝えられた古歌を場にふさわしいものとして披露することにはどのような意味があるのか。また、今城が披露した歌はどのような文化圏に属しているものかを古歌の表現を分析することで明らかにした。

【キーワード】

文化圏・万葉集第四期・伝誦歌

はじめに

大原真人今城は、万葉集第四期に歌を残しているが、そのすべては、家持に関係する場で詠まれたものである。そのような歌のあり方から家持と同じ歌の文化圏に属すると思われるが、今城自身の歌は万葉集中八首とそう多くはない。しかしながら「伝誦・伝読」したという歌が残されていることは注目すべきであろう。家持関係の歌の場で歌を残していること、また古歌を伝えていくことから、万葉集の編纂にも関わっているともされるが、伝えられた歌がその場でどのような意味を持っていたのかという事は明らかにされていない。また今城の経歴

浅野 則子

についてもまだ定説を見ていない。^{注①}今城が関わり得たとされる歌の文化圏を考え、今城が伝えた古歌に求められたものを明らかにすることが小稿の目的である。

【一】

今城の歌人としてのあり方を考える時に注目すべき歌がある。今城が上総の朝集使として京に向かう時に郡司の妻女等が餞をして詠んだとされるものである。歌は以下のようなものである。

- ① 足柄の八重山越えていましなば誰れをか君と見つつ偲はむ
- ② 立ちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや恋ひわたりなむ

二一―四四四〇・一

万葉集では、官人を見送る歌は、以下のような例が認められる。

- 石川大夫の遷任して京に上りし時に、播磨娘子の贈りし歌二首
- ③ 絶等寸の山の峰の上の桜花咲かむ春へは君を偲はむ
- ④ 君なくはなぞ身装はむくしげなる黄楊の小櫛も取らむとも思はず
藤井連の遷任して京に上りし時に、娘子の贈りし歌一首
- ⑤ 明日よりは我れは恋ひむな名欲山岩踏み平し君が越え去なば
藤井連の和せし歌一首

⑥命をしま幸くもがも名欲山岩踏み平しままたまた来む

七一一七七六〇九

心を通わせ合っていたかどうかという実態はおくとして、残された女性という立場から詠われることが形式となっていていいであろう。地方へと赴任し、都へ戻るといっていいであろう。地方へと赴任し、都へ戻るといっていいであろう。形のない女性に「残された」ことを悲しむことで相手への思いを伝える。それはともに見たものから相手を偲び、一人残されたことを悲しむことになっている。また⑤・⑥の歌は贈答となっているが、二人は山によって隔てられている。このような歌を詠う「娘子」とよばれる女性は遊行女婦とみてよいであろう。実態は明らかではないものの、都風の教養を身につけ、都の官人と歌を交わすことが可能であることは明らかである。そのような女性は、地方における官人の宴において、都風の歌を詠うために参加を求められているのである。家持が越中守の時代にも、宴に同席してしているのは遊行女婦とよばれる女性達であった。このように、地方に赴任した官人にとって宴における「女性」は遊行女婦という立場で官人と共通理解を持って詠う女性なのである。地方での役人の宴を見る限り、多くの女性は娘子と呼ばれる遊行女婦であり、妻女たちによるこの宴はきわめて珍しいと考ええてよいであろう。

今城は「朝集使」として旅立つが、又戻ってくるということは確実である。それでも宴では、今の別れを詠うことが求められる。①の歌では、例としてあげた娘子の歌と同様に山を越えることが「別れ」として歌われる。この表現から、手の届かない場所としての山の向こうへ行くということが、地方から都への旅立ちを意味するといえよう。ここで相手が越える山は「足柄山」である。足柄山は万葉集中どのように詠われているのだろうか。

⑦足柄の御坂賜はり顧みず我れは越え行く荒し男も立しやはばかる不破の関越えて我は行く馬の爪筑紫の崎に留まり居て我れは蕭はむ諸は幸くと申す帰り来まで

二一四三七二

⑧足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも

二一四四二二三

⑨わが背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か

四一三三六三

「足柄山」を詠んだ歌で、問題としている歌以外はすべて、東歌と防人歌である。⑦は防人として西に向かう男が「足柄の御坂」を「賜はり」として、神に通していただく場所として詠っている。⑧は残してきた妹に袖を振る場としている。この山を過ぎれば、もうお互いに見ることができないという二人を隔てる山である。⑨は送り出す女が別れた山の杉の間に立つて嘆くことを詠う。このように足柄山は東国から西に向かう時に越えるべき山であり、群司の妻女等の歌でこの地名を詠うのは、都から遠い場所を示し、具体的に今、送り出すことを示しているといえよう。

次に去って行く相手に対する表現の「誰をか君と見つつ偲はむ」について考えてみたい。「見つつ偲ぶ」は次のように詠われる

⑩秋萩の上に白露置くごとに見つつそ偲ふ君が姿を 十一二二五九

⑪あぢさゐの八重咲くごとく八つ代にをいませ我が背子見つつ偲はむ 二一四四四八

⑫我が妻も絵に描き取らむ暇もが旅行く我れは見つつ偲はむ 二一四三二七

⑬我が形見見つつ偲はせあらたまの年の緒長く我れも思はむ 四一五八七

⑭我がなれる早稲田の穂もち作りたる縷そ見つつ偲はせ我が背

八一―一六二四

⑮遠き妹が振り放け見つつ偲ふらむこの月の面に雲なたなびき

十一―二四六〇

⑯志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすかの山と見つつ偲はむ

十六―三八六二

⑩の歌では秋萩の上に置かれる白露を見て相手を偲ぶ。⑪は橘諸兄が右大弁比国人真人宅の宴で、庭の紫陽花が色を新たに変えながら咲くことからそれを見ながら宴の主人を偲ぼうというのである。また、⑫の防人歌は「絵」に描けるならば、それによつて妻を偲ぶことができるのにその暇もないと嘆いている。⑬は笠女郎から家持に贈った歌であるが形見として家持に物を贈ったことがわかる。⑭は坂上大嬢が夫となった家持から離れて母の田庄に稲の収穫時に出かけた時のもので、自分がいない時は稲の穂で作った「縷」を見て私を偲んでほしいと詠う。⑮は離れている女性が自らを偲ぶものとして同じ空に出ている「雲」を見ているだろうと詠う。⑯は志賀の荒雄が亡くなった時、荒雄の思い出の山として見ていたため荒雄に関係する木を切らないで欲しいと懇願する歌である。このように、見ることで相手を偲ぶためには、そこにいない相手の代わりとしての何らかの形が必要とされるよう。それを相手の形見として見ることで、両者の関係は保たれていると歌では表現するのである。しかしながらこの歌では、相手を偲ぶためにのよすがは「誰」というように代わりとなるべき他の人として詠われる。当然、あなた以上の人はいないということになるが、ここでは、二人の間に相手を偲ぶための形としての物はないのである。相手である「君」がいけないことは、両者の関係がなくなるという悲しみへとつながっていくといえるであろう。こう考える限り、ここで「見る」とは、詠った女性にとつての歌の男性との関係ではなかったのだ

ろうか。歌では「見られる男性と、見ていた女性」となるが、それは東国に赴任した官人今城の周辺にいる女性の視点として、都から来た官人をとりまく地方の女性である郡司の妻達という立場を鮮明にしてるといえるであろう。

次の②の歌は残された立場の悲しみを詠うという点では、従来の地方の女性の歌と共通である。しかし、ここでは、自らの姿ではなく、相手の姿が歌われていることに注目すべきではないだろうか。歌では女性は今城の「立ちしなふ君が姿」を忘れずにこれから恋い続けると詠うが男性、女性ともにその姿が具体的に詠われることは稀である。今城の姿として詠われる「立ちしなふ」には次の様に二首の例がある。

⑰浅葉野に立ち神さぶる昔の根のねもころ誰がゆゑ我が恋ひなくに
或る本の歌に曰く「誰葉野に立ちしなひたる」

十二―二八六三

⑱ゆくりなく今も見が欲し秋萩のしなひにあるらむ妹が姿を

十一―二八四

⑰は或本の歌に「立ち神さぶる」の句が「立ちしなひたる」とされていると記している。ここでは誰葉野にしなやかに生い茂っている昔の様子を「立ちしなひ」としている。⑱は相聞歌で男性が女性のしなやかな姿を秋萩になぞらえて詠っている。類似の表現から考える限り、男性の姿を詠ったものではなく、この点について『萬葉集釋注』では宴における今城の舞う姿として「宴の主人公の状況をほめることで悲別の情を強調した」とする。しかしながら、特に舞うということを考えてもよいのではないだろうか。ここで、問題としたいのは、今城の魅力が女性に見られることによつて表現されているということである。②

の歌は残された女性の歌ではあるが、従来のように女性自らを詠うのではなく、旅立つ男性の姿を詠っていることになる。①の歌と同様にこの②の歌からも「見られるべき男性」としての今城の存在が浮かび上ってくるといえよう。

①・②の歌はともに、その場の中心となる男性を女性の視点から詠うものに他ならない。ここに従来の方での官人のために催された宴席とは異なった女性の文化圏を見てもよいのではないだろうか。そして今城はその世界を共有していたと考えられよう。このような点からは、従来の地方での官人の為に開催された宴とは別の形を見ることのできるであろう。そして、ここでは女性達を中心となり、女性の視点を持った私的な歌の場を持つことができたと考えざるべきではないだろうか。万葉集に記されていることから見る限り、家持のまわりの官人とは別の形で、女性たちとの共有する歌世界が存在していたのであった。

〔二〕

歌について共通の理解をもっていることは、同じ歌の文化圏に属していることが大前提である。その上でどのような歌をその場で披露するのが重要であろう。古歌の披露においては、その歌の何を中心にしたいのかということでもあり、歌を選ぶことと、詠われる場において、それらの歌を構成することが求められている。菊池威雄氏は「古歌は誦詠されることに新しい歌として再生される」として、宴席の古歌は新たな場によって新たな歌として創造されるとする。今城は他の官人たちとは別の文化圏を持ち得たことが明らかであるが、歌を披露することを求められた時、どのような伝え方をしているのだろうか。まずは家持と同席したとされる宴の歌から見ていこう。

昔年に、相替はりし防人の歌一首

⑱ 闇の夜の行く先知らず行く我を何時来まさむと問ひし児らはも
先上天皇の御製の霍公鳥の歌一首

⑳ ほととぎすなほも鳴かなむ本つ人かけつつもとな我を音し泣くも

薩妙観の、詔に応へて和し奉りし歌一首

㉑ ほととぎすここに近くを来鳴きてよ過ぎなむ後に験あらめやも

冬の日に靱負の御井に幸したまひし時に、内命婦石川朝臣の、詔に

応へて雪を賦せし歌一首

㉒ 松が枝の土に着くまで降る雪を見ずてや妹が隠り居らむ

時に、水主内親王寢膳安からずして累日参らず。因りてこの日を以て、太上天皇・侍孀等に勅して曰く、「水主内親王に遣はさむが為に、雪を賦して歌を作り奉献れ」とのりたまふ。ここに諸命婦等歌を作るに堪へずして、この石川命婦のみ独りこの歌を作りて奏しき。

右の件の四首は上総国の大掾正六位上大原真人今城伝へ誦みきと云
尔。年月未だ詳ならず。

卷二十一 四四三六〜三九

これらの歌が載せられている第二十巻は、家持の歌日誌とされるものであり、日を追って歌が並べられている。この歌の左注では、上総国大掾とあるが、これらの歌のすぐあとの四四四〇・一の左注に朝集使とあることから、この時点では、都に上っておりその後、何らかの形で兵部少輔の家持と接触したと考えられよう。またこの巻の配列のあり方から見て年月日を記さない歌はその直前の年月日を記す歌と同じ宴で作られているという通説に従い、この歌群は、直前の宴の歌と同日天平勝宝七（七五五）年三月三日のものともみておく。直前の歌は、防人の檢校のために難波に訪れた勅使との宴であるため、難波での宴と考えるとよいものと思われる。

これらの歌には、それぞれには歌について説明すべく題詞がある。順を追って歌を見ていきたい。

当時、兵部少輔であり、難波での防人検校に関わっていた家持には主典刑部少録正七位上磐余伊美吉諸君の抄写によって昔年の防人の歌(卷二十一四四二五―三二)が伝えられているがこの場合は、家持の手元でない歌を文字によって贈ったことであり、宴で伝えたということとは伝える目的が異なっている。⑬の歌には、類想歌とされるものがある。

⑭ 大さ海の奥かも知らず行く我れを何時来まさむと問ひし児らはも
十七―三八九七

「天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿の、大納言に任せられて京に上りし時に、倭從等別に海路を取りて京に入りき。ここに羈旅を悲傷して各所心を陳べて作りし歌十首」という題詞を持つ歌の中の一首である。この歌は家持の父旅人が大納言に選任されたため大宰府から都へと帰る時の歌ではあるが、歌は上京の喜びを歌ってはいない。「行く」という表現からは作者の思いは、大宰府に残してきた者へ向けられている。今城の披露した歌も同様に残してきた者への思いが中心である。今城がこの歌をまず披露したのは、この場の官人が防人に関わるということに関係するが、そのなかでも、残してきた者への思いを詠う旅の歌を選んだのは同席する人々に対して防人の思いを一般的な旅の思いへと結びつけていこうとしているのではないか。さらには、旅人との関連の歌との類想から、大伴家との結びつきも否定できないであろう。この場において、今城は、宴に同席した官人の立場から防人の歌を選びつつも、そこでは共通の理解として旅立ちによって別れた者への思いを伝えたといえよう。

⑮ ⑯の歌には元正天皇と薩妙観との贈答である。この贈答歌については、女性の文化圏という視点からすでに論じているが、^註ここでは、

天皇と命婦である薩妙観との歌の場を考えつつ、歌を見ていきたい。

まず、「古に恋ふらむ鳥はほととぎす」というようにほととぎすが懐古の鳥として歌われる。この歌ではその声が作者に関係のある故人の名を呼ぶと考えてよいであろう。それに対して薩妙観は近くに来て欲しいと詠い、その声を聴くのはまさに「今」であるとして、詠われている場において、元正と故人の思いを共有する歌であろう。故人とは、従来論じられているように元正の母である元明^註であろう。元明、元正は、期待されていた男子の天皇である聖武を即位させるためにその地位についていた女性であり、この宴の場でこうした歌の披露は家持たち大伴氏にとつて大切な存在であった聖武を思い起こさせるものであったとしてよいのではないだろうか。元正と歌を交わした薩妙観は、万葉集中にこの歌ともう一首残すのみであるがそれは次のような歌である。

天平元年の班田の時に、使葛城王の、山背国より薩妙観命婦等の所に贈りし歌一首 芹の裏に副へたり

⑰ あかねさす昼は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹これ

薩妙観命婦の報贈せし歌一首

⑱ 大夫と思へるものを太刀佩きて可尔波の田居に芹ぞ摘みける

二十一―四四五・六

天平勝宝七(七五五)年に橘諸兄が息子である奈良麻呂宅で披露したものである。^註まだ、臣籍に下る前の若き日に班田に携わった当時の葛城王が、薩妙観命婦等に芹とともに送った歌とされる。ここでは、その宴における歌の意味づけではなく、橘諸兄が若い時、薩妙観命婦等という女性達とは歌と芹を送るという関係であったことを確かめておきたい。橘諸兄の歌の昼は官人としての仕事をして、煩雑な仕事の中でやっとみつけた夜の「暇」に摘んだ物であると歌う。苦勞して手

にした物を送るといふ表現は、相手に送った品物を通していかに深い思いを抱えているかを伝えるという形式をふまえている。一方、薩妙観命婦は、官人として昼の仕事を強調した歌に対して、ただありがたく受け取るのではなく、「太刀佩きて」と表現している。このように丈夫としてのその姿をあえて表現し、芹を摘むという丈夫らしくない姿を相手に認識させていることになる。これは、私的な歌の世界であり、女性からみた男性を詠っていると言えよう。薩妙観は命婦として元正天皇に仕えつつ、このような歌の文化圏を橘諸兄と共有していたのである。今城が披露した歌は、このような文化圏にあるものと考えられる。

⑳の歌は左注によって歌われた事情が明らかである。元正は病気で参内できない水主内親王に「歌」を贈ろうとしていた。歌が日常の場で求められていたことから、元正の周辺の女性の歌の文化圏をとらえることができよう。ここでは、ただひとり求めに応じることができたのが家持の祖母であった石川内命婦であることが重要である。歌は水主内親王を「妹」と呼ぶことから元正の立場であることは明らかである。元正の立場にたつて歌を詠むことができうる内命婦として、歌によって名が高められた女性こそが家持の親族なのである。改めて、大伴家と歌についての結びつきを伝えたものであろう。

この宴の伝誦歌は、まず、宴に参加している人々の「現在」の思いを共有し、その後には今城は家持が慕う聖武へと結びつく元正の私的な文化圏を披露し、さらには大伴家にとつての歌のあり方の例を示すことで、歌による結びつきを確認し合つたのではないだろうか。「ほととぎす・雪」と歌に取り上げられる自然が時期にふさわしいものではないことから、ここでは、歌つた人物を中心とした伝誦と考えてよいものと思われる。

【三】

次に「二十三日、式部少丞大伴宿祢池主の宅に集ひて飲宴せし」という題詞の歌の後に記されている伝誦歌を見ていきたい。天平勝宝八(七五六)年十一月の宴である。

智努女王の卒せし後に、円方女王の悲傷して作りし歌一首

⑳夕霧に千鳥の鳴きし佐保道をば荒しやしてむ見るよしをなみ

大原桜井真人の、佐保川の辺を行きし時に作りし歌一首

㉑佐保川に凍り渡れる薄ら氷の薄き心を我が思はなくに

藤原夫人の歌一首 浄御原宮に宇御めたまひし天皇の夫人なり。
字を氷上大刀自と曰ふ。

㉒朝夕に音のみし泣けば焼き大刀の利心も我れは思ひかねつも

㉓畏きや天の御門をかけつれば音のみし泣かゆ朝夕にして

この四首の歌の後に「右の件の四首は、伝へ読みしは兵部大丞大原真人今城」と記されている。この宴では、これらの歌の前に次のような今城の詠が記されている。

⑳初雪は千重に降りしけ恋ひしくの多かる我れは見つづ偲はむ

㉑奥山のしきみが花の名のごとやくしく君に恋ひわたりなむ

⑳には次のような類歌がある。 十九ー四四七五・六

㉒沫雪は千重に降りしけ恋ひしくの日長き我れは見つづ偲はむ

十一ー三三三四

類歌と比較する時、この歌の雪が「初雪」となっていることに注目

したい。この時期初めての雪を見てその雪が続くことを願うのは予祝として、主人を讃えることとなるが、同時にこれからずっと降るであろう雪を見ながら、ずっと相手を偲ぶことを願うのであり、相手を思いつながら、今から続く時間を強調しているのではないだろうか。

次の③の歌の序詞に歌われる「しきみ」は万葉集中この歌のみに歌われる。しきみの花の名のようにしきりにと続くが、ここでは奥山のしきみと歌われている。それは、一首目で眼前の景に目を向け、さらに今は見えない「奥山」のしきみの花と歌うことで、空間の広がりをも意識していると考えられることも可能であろう^註。

影山尚之氏は、③の歌は類歌の内容を思いつつ、その表現を現在の場にふさわしいものとしていっているとらえ、「見つづ偲はむ」という言葉は「眼前にない人物をしのぶよすがとして思慕する意味がある^註」とし、さらに次の④の歌の「恋ひ渡る」も同じ表現をする歌を例としてあげ、この二首からは、今その場にはない相手を思慕することを読み取っている。この宴では、影山氏の論じるように今、宴にはいない人物を思うことを共通の思いとすることが中心であると思われるが、それを伝誦歌ではなく、まず自らの詠歌から始めるのは、まず眼前の景に目を向け共通の思いを持ち、そこから時間的、空間的広がりを求めていると考えべきである。

続いて伝誦歌を見ていこう。それらの歌も宴の目的にそって披露されたものであるはずだが、自ら作った歌とどのように関わっていくのだろうか。一首目の歌は題詞によって円方女王が智努女王が亡くなった時に詠んだものであることがわかる^註。挽歌の表現として、亡き人のゆかりの地はその死によって荒れ果てるということになるが、ここでは荒れた土地として「佐保」が歌われる。亡き人は土地を歌うことで偲ばれ、佐保は悲しみを共有する場としてとらえられる。

次の歌は、悲しみを共有した「佐保」という土地を流れる川へと視点が向けられる。歌は佐保川を見ることが出来る相手に対し、その川

の「薄水」を自らの心情と比較している。相手への思いは、佐保川の薄水を理解することによってのみ効果を持つと考えられる。これらの二首に共通することは、「佐保」という土地を通しての相手への思いであるといえよう^註。二首が続いて披露されていく時、「佐保」はそこにいる人にとつて思うべき人へと結びついていくのではないだろうか。そして、挽歌、相聞という部立を離れ、伝わらない思いとして共有されていくと考えられよう。

「佐保」の歌に続く歌は、詠われた状況は明らかではないが藤原夫人の歌である。藤原夫人は題詞の下の細注に天武の夫人である「氷上大刀自」と記しているが、氷上大刀自は天武崩御以前に亡くなっているので、挽歌ではないとするのが一般である。この歌では、相手に届かない思いを「朝夕に哭のみし泣く」と歌う。一首目、二目目と「佐保」という地名によって共有された「伝わらない思い」は、ここで土地を離れ、具体的な悲しみとして歌われている。心の状態を詠っている「利心もなし」は多い用例ではないが、以下の例をみてみよう。

③③ いでなにかここだ甚だ利心の失するまで思ふ恋ゆゑにこそ

十一―二四〇〇

③④ 聞きしより物を思へば我が胸は割れて碎けて利心もなし

十二―二八九四

どちらの歌も②⑧の歌同様に「利心」はしっかりとした心という意味になるが、それは恋のために失われるものとしている。③④ではさらに「破れて碎けて」大きく割れる。大きく割れるという具体的な形を示して悲しみの深まりを強調しているのである。このように歌の表現から見る限り、四首目は三首目の「朝夕に」「哭のみし泣く」ことを具体的に表現を変えて披露しているといえるだろう。そして、これらの歌に共通することは、公的な場での歌でないことであろう。今城は、

家持が持ち得なかった私的な女性を中心とした文化圏を持ち得ていたと考えることも可能である。

今城の実際の詠歌の次に披露されたこれらの歌は、歌の共通理解を基にしつつ、構成されたものであり、古歌を使うことにより、古歌の背景をも取り込もうとした歌世界の広がりをとらえてよいであろう。今城は伝える歌を構成することで歌の表現そのものから続く世界を考えていたのである。そして、その時には古歌そのものでなく、古歌を構成することによってそれぞれの歌が結び付き、新たな歌世界となるため、その歌の何を強調するかを考えることが必要であったのではないだろうか。

さらに歌の作者もこの宴では意味を持っていたであろう。一首目の作者は長屋王の娘である。元正が長屋王の宅を訪れた時の歌が残されているように長屋王はかつて聖武、元正とともに訪問を受けるほどの信頼関係にあった。また、桜井王が聖武と贈答を交わしていることで聖武とのつながりは強く意識される。さらに続く古歌は、天武朝の歌であるためにこの宴で求められた共通の理解は、時間を超えた天武から聖武へ続く皇統への追慕であり、また空間を超えた佐保への追慕となる。佐保は長屋王の作宝楼もあり、華やかな文化が形となっていた場所であった。歌はこうした背景を持ちながら理解されていたと思われる。

おわりに

今城について論じられる時は、歌が残されている場から家持との関係や同席した人々との人間関係をとらえようとすることが多かった。それは、宴が開催された時の家持を取り巻く政治的環境がよくなかったために、同じ思いを持つ者が集まる場としての宴をとらえ、その場において共通の思いを託した歌が彼らにとって重要なものとされてい

たからである。こうした歌の場における共通認識を家持の文化圏とし、その中に今城という人物を組み込むならば、今城の存在の意味を考える時には、宴の場、時期、同席した人々という実態的なことを考えると同時に披露された歌の表現そのものからもとらえていくことも必要となるであろう。宴という場にふさわしい古歌は、単にその歌と詠われた背景を伝えることでは十分ではなかったはずである。家持を中心とした都の官人たちを納得させる古歌を知りつつ披露するということは、その場において歌そのものによる人々の結びつきを求めたものであろう。そのために必要であったのは、従来都の官人の間で共有されていた歌だけでなく、今城が持っていた私的な文化圏の歌だったのではなかっただろうか。数首の歌をその場にふさわしいものとして構成していく時、今城が知り得た文化圏は官人達に歌を通じて新たなつながりを作り上げたであろう。その時に詠われた歌はまたそれぞれ新たな理解を与えられることによって共有する歌世界に再生されたのではないだろうか。

注① 五一九の題詞「大伴郎女の歌一首」に付された注に「今城王の母なり。今城王は後に大原真人の氏を賜はりしなり」とあるところから福田良輔氏は同一人物であるとする。「万葉作者「今城王」考」『国語・国文』二一十 昭和七年十月。

注② 天平勝宝三年正月二日に越中守家持の館で行われた宴では「遊行女婦蒲生娘子」と称される女性が同席し詠っている。(巻十九一四二二三三・三六三七)但し四二二・三六・七は伝誦したと記されている。

注③ 『萬葉集釋注』四四四一歌の釈文。また、新日本古典文学大系『萬葉集』のこの歌の脚注では「君の姿を忘れることができなければ、生涯辛い恋に苦しみつづけることになるだろうと惜別を

詠う」という解釈をしている。

注④ 菊池威雄氏「天平の集宴歌」『天平の歌人 大伴家持』新典社研究叢書一七二 平成十七年十月

注⑤ 『萬葉集釋注』四四三六歌の釈文。

注⑥ 「共有される心」『別府大学紀要』第四十四号 二〇〇三年

注⑦ 「本つ人」について『新潮古典集成』では、父草壁皇子、弟文武天皇を含むとする。『萬葉集釋注』ではそれを受けて、白鳳皇統そのものが回想されたとする。

注⑧ 左注は次のように記している、右の二首は、左大臣これを読みきと云ふ。

注⑨ 『萬葉集釋注』では⑩の歌の「見つつ偲はむ」を受けて⑪では「類き見」を掛けているとする。四四七六歌の釈文。

注⑩ 影山尚之氏「万葉末期の哀傷歌―天平勝宝八歳池主宅の宴歌―」『上代文学』七一号 一九九三年十一月

注⑪ 釈注では 今城が智努女王が薨じた事情を知っていたとする。『萬葉集釋注』四四七七の釈文

注⑫ 影山氏は「佐保」という地名について佐保には聖武の御陵地として特別な意味があったとされる。

注⑬ 長屋王宅でのと聖武と元正の歌は次のようなものである。
太上天皇の御製の歌一首

はだすき尾花逆葺き黒木もち造れる室は万代までに
天皇の御製の歌

あをによし奈良の山なる黒木もち造れる室は座せど飽かぬかも
右は、聞くならく、左大臣長屋王の佐保の宅に御在して肆宴
したまひしときの御製なり。

卷八一 一六三七・八

注⑭ 桜井王と聖武の贈答は次のようなものである。

遠江守桜井王の、天皇に奉りし歌一首

九月のその初雁の便りにも思う心は聞え来ぬかも

天皇の賜へる報和の御歌一首
大の浦のその長浜に寄する波ゆたけく君を思ふこのころ

卷八一 一六一四・五

注⑮ 『萬葉集釋注』では藤原夫人の歌へと続くことについて「白鳳回帰」としている。四四七九・八〇歌の釈文。

注⑯ 真下厚氏はこのような研究の状況をまとめつつ、今後は「どのような人たちの歌を伝えているのが今城の歌人的性格を考える上では大きな問題であろう」とされ、天皇の歌を伝えていることの意味から、今城はこうした高貴な人々の歌を伝誦するだけの「格と能力とを備えていた歌人」と位置づけている。「大原今城の歌」『万葉の歌人と作品』第十一卷 東歌・防人歌・後期万葉の男性歌人たち 和泉書院 二〇〇五年 五月二〇日

万葉集の本文は『新日本古典文学大系』(岩波書店)による。

付記 大原今城の歌数については九首とする説もある。

その場合は卷二十一―四四五九の歌も含めている。しかし左註には「兵部大丞大原真人今城先日他所読歌也」とある。「読歌」については、本文中で取りあげた四四七五―八〇の歌の左註の「伝読」と同様に今城の作ではなく伝え「読む」歌と考えるべきであろう。以上の点から今城の歌数を八首としておく。